

<ワークショップ報告>

①初年次学生に対するプレゼンテーション指導法

担当者 : 長山恵子(金沢工業大学)

概要 : 初年次教育においても座学中心の授業からの脱却を図り、グループ討議やグループ演習などを実施し、その結果をプレゼンテーションさせる授業が増えている。プレゼンテーションの実施にあたっては説明内容の充実度を評価することは当然であるが、聞き手に伝えるための技法(話し方や態度、提示資料の作成方法)も重要であることを併せて指導する必要がある。このような観点から、本ワークショップでは、プレゼンテーション技法の説明におけるポイントとその技法を活用するための演習の進め方を説明し、さらに演習を通して学生が自身のプレゼンテーションの良い点と改善点を把握するための評価方法とそのフィードバック方法についても検討した。参加者にもグループを組んで、実際に演習の一部を体験してもらい、それぞれの授業において使うことができるようになることを目指した。説明内容についての質問も多くあったが、さらに、参加者自身の体験談やアイデアの紹介もあり、情報共有の良い機会となった。

キーワード : プレゼンテーション技法、動機付け、評価方法

②モデル授業公開検討会(1): 初回イントロダクション

担当者 : 藤田哲也(法政大学)

中川華林(法政大学)

概要 : 本ワークショップでは、担当者(藤田)が実際に法政大学で行っている初年次教育科目である「基礎ゼミ」について、実際に模擬授業を行い、授業後に参加者と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をした。各参加者が、自分自身の授業計画を見直したり、授業の進め方について工夫するための観点を豊富にすることが、本ワークショップの目的であった。今回は、ワークショップの前半の時間を使って、年度初めの第一回目の授業を想定した「イントロダクション」を行った。後半では、どのようにすれば受講生に対して「基礎ゼミ」の教育目標を適切に伝えることができ、授業に参加することの重要性を実感してもらえるかについて、理論と実践の双方から議論を行った。参加者の皆様には、前半は受講生の視点を持って授業を受けていただいた。授業の冒頭のアクティビティが極めて重要であるため、本ワークショップにはできるだけ遅刻をせずに参加していただければと事前をお願いをしたところ、遅刻者はいなかった。後半の冒頭では、指定討論者(中川)から、授業をよりよくするための議論を促す論点として、「授業目標の明示」「気づきを得ることの重要性」「ペアワークの意義」が提示され、それらの論点について全参加者で意見交換をした。最後に、参加者自身が初回授業を行

う場合を想定し、「どのような内容を授業に取り入れるか」「初年次教育の目標を学生に理解させるための工夫」について具体的に考えることができるようになったかどうかの振り返りを行った。

キーワード : 初年次教育モデル授業, 授業検討会, 気づき, シラバス

③ 2030年の初年次教育を考える

担当者 : 田中 岳 (九州大学)
立石慎治 (国立教育政策研究所)

概要 : 「2018年問題」に大きな関心が寄せられている。18歳人口が再び減少に転じ、志願者(入学者)減という現実が切実さを増すからである。そして、その先2030年には100万人を切ることが見込まれている。各大学は、いよいよ正念場といったところであろう。では、2030年度の初年次教育は一体どのようなものだろうか。本ワークショップは、大学間のサバイバル競争という課題を保留し、大学関係者として2030年の初年次教育を考えてみようとするのがねらいであった。とはいえ、願望や確信からではなく、起こり得る状況(可能性)の吟味を検討の中心に置いた。すなわち、現在の初年次教育を動かしている「ドライビング・フォース」のあぶり出しである。2030年を見据えることが、現在を再考することに繋がる試みといえよう。ワークショップを通じて、自身の考える(考えてきた)初年次教育へのアプローチを捉え直す対話が展開された。プログラムの冒頭には、次のような目標、役割、過程を提示し、構造的なグループワークを進めた。[目標]ワークショップ終了後には、参加の皆さんが、所属大学における課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになる。[役割]担当者は会場の相互作用を活性する進行に努め、参加の皆さんには主体的な活動をお願いする。[過程]ミニレクチャーとダイアログという対話方法を織り交ぜながら、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体での共有を行う。

キーワード : 2030年, 組織化(アプローチ), シナリオプランニング, 人口減少社会

④ クリティカル・シンキングを育成する初年次教育

担当者 : 川島啓二 (九州大学)
久保田祐歌 (徳島大学)
池田史子 (山口県立大学)

概要 : クリティカル・シンキングは、物事を鵜呑みにしないで考えるという認知スキルおよび非認知スキルのことであり、学士課程教育においても、段階的に向上させていく必要がある。従来の初年次教育においては、大学での学習の基礎となるレポートの書き方、プレゼンテーションの方法などのスタディ・スキルの修得や、コミュニケーション能力を育成することが重視されてきた。そこへ、クリティカル・シンキング等の思考力の育成を同時に組み込む

ことも可能ではなかろうか。本ワークショップでは、賛否の分ちがたいテーマについて、グループワークによって課題の背景や前提について確認し、賛否の両面について多角的な視点から検討したうえで、論拠の構築を行い、プレゼンテーションするという授業デザインをご体験いただいた。学生にクリティカル・シンキングを身につけさせるためには、その評価基準を伝えるだけでなく、その基準によって他者や自己の取組を評価させることが有用である。そこで、「クリティカル・シンキングのプロセスを論証型レポートやプレゼンテーションに活用するためのルーブリック」をご提案し、上記プレゼンテーションに対しての他者評価・自己評価も組み込んだ。限られた時間ではあったが、参加者には、学生の立場でグループワークやルーブリックを用いた相互評価をご体験いただいたことが好評であった。

キーワード : クリティカル・シンキング, スタディ・スキル, ルーブリック, 自己評価・他者評価

⑤協同学習の考え方と進め方

～アクティブ・ラーニング時代のグループ学習を考える～

担当者 : 関田一彦(創価大学)

概要 : アクティブ・ラーニングと呼ばれる教育方法が奨励されている。その定義は様々だが、形態的にはグループを用いた学習活動を重用するのが一般的である。ところが、効果的なグループ活動のさせ方など、グループ学習についてよく分からない状態で試行錯誤なされる先生方もおられる。そこで、このワークショップではグループ学習の質を高め、望ましい学習成果をあげる教育方法として、その効果が確かめられている協同学習について体験的に学びあった。具体的には、一昨年、昨年と参加者から好評をいただいた内容をもとに、大きく次の3点についてお話しした。

- ・アクティブ・ラーニングが求められる背景
- ・グループ学習の課題と対応
- ・協同学習の効用

ワークショップではシンク・ペア・シェアやラウンドロビンなど簡単にできる技法に加え、二重にグループを使う「特派員」も体験していただいた。

キーワード : アクティブ・ラーニング, グループ学習, 協同学習

⑥初年次教育の質を高める教員協働を考える： 文章表現科目の実践を例にして

担当者 : 成田秀夫(学校法人河合塾)

中村博幸(京都文教大学)

山本啓一(九州国際大学)

概要 : 初年次教育では、レポート作成スキルを習得させる文章表現科目を、初めて

担当する教員が多い。また、専門やキャリアの異なる教員が一緒にライティング科目を担当する場合も多い。しかし、教員の教育観や指導観が「暗黙知」化され、お互い齟齬をきたしていると、上手く進めることができない。そこで、本ワークショップでは、チェックリストを用いて対象学生の状況や、教員の指導観や教育観を確認し合い(チェック & シェア)、教員協働の前提として教員同士の認識の違いを共有化することの重要性を確認した。その上で「シラバスの作成→教材作成→授業→評価方法の開発」というプロセスのなかで、どのように教員が協働していくのかについて、九州国際大学の先進的な取り組みを参考にしながら、参加者がグループに分かれてディスカッションした。それぞれの大学で抱えている課題についても議論しながら、教員が協働するためには、初年次教育科目の目的・目標を明確にすること、協働を支えるファシリテーションの必要性、教員が気軽に意見交換できる雰囲気や機会づくりの重要性などについても確認された。

キーワード : 文章表現, ライティング, 教員協働

⑦ LTD 話し合い学習法

担当者 : 安永 悟(久留米大学)

概要 : LTD (Learning Through Discussion) は、テキスト(課題文)を読解する理想的な学習法であり、対話法である。本ワークショップでは、LTDの基本的な考えと実践方法を、具体的な課題文を用いて体験的に理解した。また、大学授業への導入方法についても検討した。LTDは協同学習の一技法であり、個人による予習と集団によるミーティングによって構成されている。予習もミーティングも、LTDの基本的な考え方と手続きが凝縮されたLTD過程プラン8ステップ(雰囲気づくり、ことばの理解、主張の理解、話題の理解、知識との関連づけ、自己との関連づけ、課題文の評価、ふり返り)に沿って展開する。LTD参加者は過程プランにそって課題文を予習し、予習ノートを作成する。ミーティングでは、その予習ノートを手がかりに、仲間との対話を通して課題文の理解を深める。LTDを実践するには、LTDの基盤となる協同学習の考え方と技法の習得が前提となる。本ワークショップは協同学習の初学者も理解できる構成となっていた。LTDを獲得すると、PBLやTBLを初めとしたグループを活用した学習の質を高めることができる。また、LTDによる読解力が基盤となり、論理的な言語技術の育成にも役立つ。

キーワード : LTD, 読解力, 文章作成力, 協同学習, 授業づくり